



画像出典…松前町教育委員会

家老で画家の蠣崎波響（かきざき はきょう）（1764—1826）

日本の先住民族アイヌ

世界には先住民族と名付けられる人々が存在します。国際連合は一九九二年に「外部の地域から異質の文化をもつ異質の人々が到来し、地元住民を支配し圧倒して人口を減少させ、非支配的な立場や植民地的状況にしてしまった時代に、現在の地域に生活していた人々の現存する子孫」と定義しています。要約すれば、外部から侵入した人々によって支配されるような状況になってしまった民族で、現在、世界七〇カ国に約五億人が存在します。

筆者は二〇〇四年に南米大陸南端のプエルト・ウィリアムスという寒村を訪問したことがあります。そこにはアジア大陸から北米・南米大陸を経由して約六〇〇年前に到達したヤーガンという先住民族が生活していましたが、侵入してきたヨーロッパの人々に駆逐され、純血のヤーガンの最後の一人だけが生存していました。しかし今年二月にその一人が死亡しました。世界では過去五〇〇年程度の期間に、このような事態が発生してきたのです。

日本ではアイヌ民族が定義に該当し、かつては蝦夷という呼称で北海道内から千島列島や樺太にかけて生活していました。しかし室町時代から戦国時代にかけて渡島半島の南端に和人の蠣崎一族が政権を確立し、豊臣秀吉と徳川家康からアイヌの人々と交易する権利の独占を認定され、松前藩が成立します。各藩はコメの石高により領地が確定しますが、当時の道内ではコメが栽培できなかったため、交易の権利だけが付与されていました。

そこで収益増大のためアイヌの人々と過酷な交易をしてきた結果、一六六九（寛文九）年に東蝦夷地を拠点とするシャクシャインを首長とする一族が反乱し、四〇〇人にもなる和人が殺戮される騒乱になりました。しかし騒乱は鎮圧され、蝦夷地内におけるアイヌ民族の勢力が衰退していきます。さらに一九世紀になるとロシアが南下するようになったため北方の防備が重要になり、一八〇七（文化四）年には幕府が全域を直轄することになります。

そのため松前藩は陸奥の梁川（現在の福島県伊達市）に九〇〇〇石を拝領して転封になりました。しかし一八二一（文政四）年には再度、松前に復帰、城郭（福山城）を建造しますが、一八五五（安政二）年にロシアと日露和親条約が締結されて箱館が開港されたため、出羽の東根（現在の山形県東根市）の領地を追加して柳川に転封するというめまぐるしい移動を経験します。このような動乱の時期に松前藩の家老であったのが蠣崎波響です。

京都で画業の修行をした波響

波響は一七六四（宝暦一四）年に松前藩第七代藩主の松前資廣の五男として松前城の前身である福山館で誕生しました。当時は成長とともに改名するのが一般で、金介、廣年、将監（しょうげん）、東岱（とうたい）など一〇以上の名前がありますが、以後は画号である波響で紹介します。藩主の側室であった母親は家臣の長倉長左衛門貞義の娘の勘子でした。父親の藩主は波響の誕生の翌年に逝去し、後継として第八代藩主となった松前道廣は異母兄になります。

波響はすでに幼少の時期から絵画に才能を発揮し、八歳のときには松前城内の馬場で藩士が馬術の稽古をしている様子を見事に写生したことで話題になり、叔父の松前廣長が自身で教育をするようになります。廣長は多数の著書があるほどの文武両道の人物ですが、このような才能を北方の土地に放置しておくべきではないと、波響を江戸の藩邸に送付し、当時、俳人、歌人、画人、文人として名高い建部凌岱（たけべりようたい）に師事させます。

ところが波響が一歳になった一七七四（安永三）年に凌岱が死亡しますが、凌岱の遺言により宋紫石を師匠とします。当時の日本画界は南蘋（なんぴん）派が主流でした。清国から一七三一（享保一六）年から二年だけ長崎に來日して写実的花鳥画の技法を伝達した沈南蘋を元祖とする一派で、その高弟である宋紫岩に入門したのが宋紫石（本名は楠本幸八郎）です。波響が指導を依頼した時期は紫石の晩年ですが、その写実の作風を忠実に学習しています。

その一例が、紫石の三幅一對の「鯉花鳥図」の一幅を模写した「瀑布双鳩図」で、垂直に落下する瀑布の前面の老木の小枝に止まる二羽の鳩を描写した図柄で、落款は最初の師匠であった凌岱を意識した東岱を使用しています。紫石の作品を参照しているとはいえ見事な画力ですが、殿様の直系で後継となる場合もある身分では江戸で絵画の修行をしているわけにもいかず、二〇歳になった一七八三（天明三）年に故郷に帰還しました。

アイヌ酋長の肖像「夷酋列像」

ところが松前に帰還して六年が経過した一七八九（寛政元）年に事件が勃発しました。根室から羅臼にかけての東蝦夷地、その東側の洋上に点在する国後、択捉、齒舞、色丹など三九の島々は松前藩領とされ、それらの場所に生活するアイヌの人々との交易の権利を本土の商人に付与していましたが、過酷な取引だけではなく住民への対応も苛烈であったため、クナシリのアイヌの人々が蜂起し、和人を襲撃したクナシリ・メナシの騒乱が発生したのです。

この騒乱で現地に生活していた七〇人余の和人が殺害されました。当時は冬期でも凍結しない港湾を確保するためロシアが南下しはじめており、現地で内乱が発生するのは松前藩にも幕府にも深刻な問題でした。実際、この騒乱から三年が経過した一七九二年にはロシアの軍人A・ラクスマンが通商を要求して根室に到来しています。そこで松前藩は二六〇名の部隊を派遣して鎮圧しますが、その部隊を指揮した一人が波響でした。

しかし、すべてのアイヌの部族が蜂起したわけではなく、和人を保護した部族も存在しました。そこで松前藩に協力した四三の部族の酋長を松前に案内し、藩主の松前道廣が謁見し、その命令で波響は中立を維持した一二名の酋長の肖像を描写した「夷酋列像」を制作しました（図1～図3）。騒乱の発生で喪失した藩の威信を回復するため、すでに家老となっていた波響は一七九〇（寛政二）年に完成した一二幅の絵画を持参して翌年上洛します。

この絵画は画力が秀逸であるとともに、内地の人々が見聞したことのない風貌の一種の異人を描写しているため京都で話題になり、親交のあった高山彦九郎や大原左金吾の尽力により光格天皇に拝謁することになりました。そのため波響の名前は絵師として洛内に衆知されることになりました。波響は京都に滞在して藩政を担当するとともに、当時の第一人者であった円山応挙に師事して従来とは相違した画風を習得していきます。

外国で発見された「夷酋列像」

この一二幅の名画は忘却され行方も不明で、幕末の一八四三（天保一四）年に小島貞喜が忠実に模写した複製以外に何点かの複製が残存しているだけでした。ところが一九八四年一〇月に驚嘆するニュースが発表されました。波響の地元の『北海道新聞』に「江戸時代“松前応挙”とうたわれた松前藩家老蠣崎波響の「夷酋列像」の一一幅



図3 夷酋列像
(ツキノエ)



図2 夷酋列像
(イニンカリ)



図1 夷酋列像
(イコトイ)

もがスイス国境に近いフランスのブザンソン私立博物館に収蔵されていた」という記事が掲載されたのです。

ブザンソンはスイスとの国境まで六〇キロメートルの人口一二万人の地方都市で音楽愛好の人々には一九五九年に二四歳の小澤征爾が優勝したことで有名な「ブザンソン国際指揮者コンクール」の開催都市ですし、紀元前一世紀にガリア民族とユリウス・カエサルが戦闘した場所としても有名です。そのような場所に家老の廣長の序文が添付された「夷酋列像」の原画が収蔵されていた経緯は不明ですが、日本にとっては世紀の発見でした。

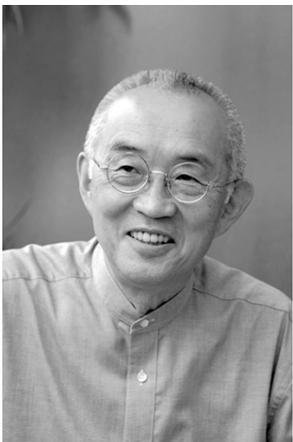
二足の草鞋の意義

図版でも明瞭ですが、一般に日本画という言葉から想像される花鳥風月とは異質の人物を描写した絵画で、その鋭利な眼光は狩猟民族であるアイヌの人々の性格を表現して、波響の画力を証明しています。さらに家柄から最高の画布と最高の絵具を使用した品格のある絵画です。しかし京都で応挙に師事してからは、いわゆる「円山派」の画風に変化し、「夷酋列像」が発散する迫力は消滅し、伝統ある日本の絵画の枠内に回帰していきました。

しかし、小藩とはいえ家老自身が描写した絵画には価値があり、冒頭に説明したように海外からの侵略を防衛するため、一七九九（寛政一一）年に松前藩の領地であった蝦夷地の大半が幕府の直轄になり、東北に転封されたとき、再度、蝦夷地に復帰するための運動に波響の絵画が贈物に利用されたとされています。日本が開国へと移行していくとき、家老として際立った活動はなかったものの、技芸が貢献したという意味では活躍した人物でした。

「二足の草鞋」という言葉があります。一般には両立しないような複数の仕事を一人の人間が達成することです。森林太郎は陸軍軍医総監という医師として最高の地位に到達する一方、森鷗外として近代日本を代表する作家になっています。外国では二六歳で史上最年少ロンドン市議会議員、二九歳で史上最年少国会議員となり、借金返済のため執筆した小説が大当たりして作家としても成功したジェフリー・アーチャーも有名です。

絵画の世界では波響と類似の境遇にあった酒井抱一が有名です。姫路藩主の家系に誕生しながら後継となることを拒否して画家として活躍し、出家して権大僧都にまで出世しています。これらの人々が生活した時代と比較すれば、現在は人間が長寿になり、社会環境も急速に変化しています。今回紹介した蠣崎波響を世界に誇示できる傑作を描写した画家としてだけでなく、複線の人生を体現した人物として理解することにも意味があります。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。